

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：34606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K17555

研究課題名（和文）アフリカにおける集団簡易減酒プログラムの開発と長期的効果の検証

研究課題名（英文）Development of a community-based group brief-intervention and evaluation of its long-term effectiveness in Kenya

研究代表者

高橋 里沙 (Takahashi, Risa)

天理医療大学・医療学部・准教授

研究者番号：90596206

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アフリカ農村地域のハイリスク飲酒者を対象にした個人対象簡易減酒プログラムの質的評価の実施し、結果を踏まえて、集団を対象とした簡易減酒プログラムを開発することを目的に、集団の早期介入プログラムを実施した。

介入後に減酒を継続できた背景には、減酒継続には、家族や友人関係のサポートが必要で、仕事が見つかることや、飲酒以外の楽しみ、将来への希望につながる継続支援が、減酒以降に適量飲酒行動を継続するためには必要であることがわかった。集団簡易減酒プログラムは、COVID-19の影響を受け、多くの対象者がプログラム及び評価を継続することができず、効果の有無は実証が困難であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療施設や資源の乏しい地域において、命の直結しない健康問題は後回しにされがちである。しかし、過剰な飲酒は確実に健康を害し、かつ家族や地域に及ぼす影響は大きい。本研究は、地域にある人的資源を活用し、予防的な介入をすることで持続可能なプログラムを開発した。同様の問題を抱える資源の乏しい貧困地域や開発途上地域においても活用できるものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）： This study aimed to evaluate the simplified individual program for reducing alcohol consumption among high-risk drinkers in rural Africa, to reveal the factors influencing the alcohol reduction and to explore the perceived solutions to the challenges faced by participants and CHWs.

The factors influencing alcohol reduction after the intervention showed that support from family and friends was necessary for continued sobriety reduction, a support for finding a job, and hope for the future was necessary for continued moderate drinking behavior. The group brief intervention was affected by COVID-19 seriously, many subjects were unable to continue the program and/or attending evaluation, it made difficult to conclude whether the program was effective.

研究分野：国際看護学 精神看護学

キーワード：アルコール 飲酒 アフリカ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

飲酒は、世界の試飲の5.3%を占め、200以上の疾病や傷害の原因となっていると言われてい
る(WHO, 2018)。また、個人の健康被害にとどまらず、飲酒問題は、自殺や暴力、飲酒運転など
家族や社会にも重大な問題を引き起こしている。これまでに、ケニア西部の調査で病院に搬送さ
れた交通事故患者の23.4%が飲酒していたことが報告されている(Oderi, 1988)。また、ケニア
の農村地域の飲酒者は、年々増加傾向にあり、ケニアにおける飲酒問題は深刻化していると言
える。西部農村地域では、密造酒の消費が多く、飲酒者の増加を招いている(NACADA, 2013)。この
密造酒は違法であるが、農村地で安価に入手できる材料で作ることができるため、規制するこ
とは非常に難しい。アフリカの低所得では、感染症や母子保健分野を優先して取り組んできたため、
精神疾患や依存症に関するデータや予防的な介入が乏しい。また、医療スタッフや施設の数も慢
性的に不足していることから、依存症になった場合に治療を受けられるチャンスは少ない。前回、
アルコール依存症患者を増やさないために、個人簡易減酒プログラムを開発し、実施した結果、
効果があることが明らかになった(Takahashi, 2017)が、飲酒量に変化があった人とそうでなかつ
た人、また飲酒量に変化があったにも関わらず、継続することが難しかったグループがあった。
また、個別の介入を複数回実施したため、人的資源や、文化的な背景等を考慮した場合、集団で
実施する方が介入者の負担が少なく、効果的な介入ができるのではないかと考えた。そのため、
個人簡易減酒プログラムの参加者の中から、飲酒量の変化与える要因とその持続性に変化を与
える要因について明らかにした上で、集団で実施できる簡易減酒プログラムの開発をする必要
があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、第一段階としてケニア西部農村地域において実施した、個人簡易減酒プログラムの質
的評価の実施、第二段階としてその結果を踏まえた集団簡易減酒プログラムを地域住民ととも
に開発し、効果について検証することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

第一段階: Qualitative Study

第二段階: Population-based Quasi-experimental study

(2) 調査地域

ケニア西部

(3) 調査対象

第一段階: Alcohol Use Disorders Identification Test (AUDIT) のハイリスク飲酒者
を対象にした半年間の個人集団減酒プログラムに介入グループとして参加した46名
第二段階: 意図的に選択された2村に居住するAUDITにてスコアが、8~19点(高リ
スク飲酒者)であった18~60歳までのうち、調査への同意が得られた住民。

(4) 調査方法

第一段階: データは、プログラム中に減酒に成功した人々と、飲酒行動に変化がなく減
酒にいたらなかった人々を別々に、合計46名、7グループのフォーカスグループディ
スカッション(FGD)と、コミュニティヘルスワーカーを対象にキー・インフォーマ
ント・インタビューによって収集した。分析には、Nvivoを使用し、帰納的内容分析を
用いて分析した。

第二段階: 村Aを介入グループ、村Bをコントロールグループとし、各グループ55名
をリクルートし、4週間ごとに4回のグループセッションを計画した。(COVID-19の影
響により、初回のグループセッションのみ実施) 初回実施1年後に評価を実施した。

(5) 倫理的配慮

調査国、ケニアメゾジスト大学倫理委員会にて承認を得た。一般的な倫理的配慮に加え
て、非識字者が多数居住している地域であるため、現地言語が堪能な研究補助者を準備
し、研究期間を通して、調査対象者とのコミュニケーションや理解の相違がないよう
に努めた。AUDITスコアが、20点以上になった、アルコール依存症を発症している可能
性のある人には、希望があれば治療を受けるために医療機関までの交通費を負担する用
意があることを伝えた。

4. 研究成果

減酒を継続できた要因としては、「仕事や飲酒以外の活動が見つかった。」 「家族の励
ましや家族が喜んでくれた。」 「飲酒に使っていたお金が他に使えるようになった。」 「自
分が健康になった気がする。」 減酒が継続できなかった要因は、「友人の誘いがあった/人
間関係(友人関係)に亀裂が入った」「減酒を試みたが現状は何も変わらない。」「希望
がない/減酒するメリットがわからない。」「飲酒以外他にすること(楽しみ)がない。」
ということが明らかになった。調査の結果、減酒継続には、家族や友人関係のサポート

が必要で、仕事が見つかることや、飲酒以外の楽しみ、将来への希望につなげる継続支援が、減酒以降に適量飲酒行動を継続するためには必要である。
 介入群と対照群の各 55 名、合計 110 名のベースライン調査では、平均年齢は、介入群 43.5 歳、対照群 46.6 歳で、大多数が男性であった。ベースライン変数に基づく研究群間の有意差は、学歴を除いて認められなかった。ベースラインの平均 AUDIT スコアも 2 群間で同様であった。

表 1 ベースライン

Characteristic	Control (n=55)	intervention (n=55)
Mean (SD) Age (years)	46.6 (1.7)	43.5(1.6)
Gender		
Male	47 (90.4)	38 (73.1)
Female	5 (9.6)	14 (26.9)
Wealth index tertile		
1	15 (28.9)	17 (32.7)
2	16 (30.8)	18 (34.6)
3	21 (40.4)	17 (32.7)
Education		
None	5 (9.6)	6 (11.5)
Primary	21 (40.4)	29 (55.8)
Secondary/higher	26 (50.0)	17 (32.7)
Marital status		
Married/in union	41 (78.9)	39 (75.0)
Not married	11 (21.2)	13 (25.0)
Religion		
Catholic	18 (34.6)	29 (55.8)
Protestant	34 (65.4)	23 (44.2)
Number of friends who drink		
0-2	14 (26.9)	18 (34.6)
3-5	17 (32.7)	14 (26.9)
>5	21 (40.4)	20 (38.5)
Household member drinks		
Yes	39 (75.0)	36 (69.2)
No	13 (25.0)	16 (30.8)
Alcohol sold/made at home		
Yes	11 (21.2)	13 (25.0)
No	41 (78.9)	39 (75.0)
Uses tobacco product		
Yes	24 (46.2)	14 (26.9)
No	28 (53.9)	38 (73.1)
Audit score	13.4 (3.4)	14.4 (3.6)

初回介入の 1 年後の評価で追跡できたのは、介入群 33 名、コントロールグループ 28 名であった。介入群及び、対照群ともに、AUDIT スコアの減少がみられたが、COVID-19 の感染拡大に伴い、集団で集まる機会の減少、移動制限等が設けられた影響が大きいと考えられる。

表 3 1 年評価

Study Group	Baseline AUDIT		AUDIT at 1 year	
	N	Mean (SD)	N	Mean (SD)
Control	55	13.4 (3.4)	28	10.1 (3.56)
Intervention	55	14.4 (3.6)	33	11.1 (4.12)

引用文献

引用文献

WHO. (2018). *Global status report on alcohol and health 2018*. Geneva : WHO.

Wodero. (1998 Dec;75(12)). Alcohol-related road traffic injuries in Eldoret, Kenya. . East Afr Med J.

Evaluation of Alcohol Screening and Community-Based Brief Interventions in Rural Western Kenya: A Quasi-Experimental Study, Risa Takahashi et al, Alcohol Alcohol . 2018 Jan 1;53(1):121-128. doi: 10.1093/alcalc/agx083.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Risa Takahashi et al.
2. 発表標題 Qualitative Evaluation of Community -based brief-intervention in rural Africa
3. 学会等名 The 18th International Conference of Public Health Sciences
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------